

〈研究ノート〉

経営倫理学におけるポストモダン論争とは何だったのか

岩 田 浩

キーワード

経営倫理学
 ポストモダン
 方法論争
 基礎づけ主義／反基礎づけ主義

目 次

- I. 序 言
 ——等閑視されてきた1つの方法論争——
- II. ポストモダン現象としての経営倫理学とは何か？
 ——R. M. グリーンの所論をめぐって——
- III. 経営倫理学とポストモダニズム：それは危険な戯れか？
 ——C. C. ウォルトンのグリーン批判をめぐって——
- IV. ポストモダンな経営倫理学は可能か？
 ——A. グスタフソンの所論をめぐって——
1. グリーンに対する批判
 2. ウォルトンに対する批判
 3. ポストモダン経営倫理学の諸特徴
- V. 結 言
 ——経営倫理学におけるポストモダン論争の意義——

I. 序 言

——等閑視されてきた1つの方法論争——

経営倫理学の理論的進展を振り返るとき、1990年代半ばは1つの大きな転換期であったことが見て取れる。

周知のように、斯学は、経営学史的に見たとき、「経営と社会 Business and Society」研究の領域において70年から80年代にかけて主流をなしてきた「企業の社会的パフォーマンス理

論」——そこでは、価値自由の名の下、経営の社会的応答政策が活発に議論された——に代わり、当時英語圏を中心に台頭してきた応用倫理学の成果を積極的に取り込むことで、ビジネス・モラルに関わる諸問題をより学際的に踏み込んで捉えようとするべく生成してきたものである。

ところで、揺籃期の経営倫理学では、主として、規範倫理学において既に正当化された幾つかの道德原理（通常、功利主義、権利、正義の3種）を援用して正しい経営意思決定をいかに下すかが主題であった。わが国で逸早く経営倫理学を紹介した高田馨がそれを「道德基準論」として特徴づけたのも、そのためだ¹⁾。ところが、90年代になると、こうした理論傾向に対する疑問が相次ぎ提示されるようになってきた²⁾。それとともに、経営倫理学の理論的・方法論的特性を改めて検討し直そうという学術的機運も高まってきた。その1つの現象が「事実／価値二分法」に関わる論争（「経験的」経営倫理学／「規範的」経営倫理学論争）である³⁾。これをめぐっては、これまで幾多の研究者によって論評されてきた⁴⁾こともあり、ある程度知

1) 高田馨『経営の倫理と責任』千倉書房、1989年。

2) その先陣を切ったのが、Stark, A., "What's the Matter with Business Ethics?", *Harvard Business Review*, May-June, 1993. である。

3) この論争をめぐっては、*Business Ethics Quarterly*, Vol.4, No.2, 1994. で特集号が組まれ、9本の論文が寄稿されている。尚、この企画のオリジナルは、1992年に開催されたアメリカ経営学会の the Social Issues in Management 分科会の年次会合でなされたシンポジウムである。

4) 例えば、Rosenthal, S. B., and R. A. Buchholz, /

られている。

さて、本稿で取り上げたいのは、ほぼ同じ時期に生じたもう1つの論争、すなわち「経営倫理学はポストモダン現象として捉えられるか否か」をめぐる問題である⁵⁾。これは、先の「規範(価値)/経験(事実)」論争に比べ、参画者が少なく、また争点も不鮮明であったためか、これまでほとんど等閑視されてきた。とはいえ、21世紀になって、特に欧州圏において、ジャック・デリダやエマニュエル・レヴィナスの知見から経営倫理学を検討し直そうとする傾向⁶⁾が散見されることを考えれば、この半ば忘却された論争について一瞥を加えるのもそれなりの意味があろう。

そこで、以下では、次のような構成で論を展開することにした。まず、この論争の仕掛人であるロナルド・M. グリーンの所論を概観する。次いで、これに対し真っ向から批判を浴びせたクラレンス・C. ウォルトンの主張を要約しよう。さらに、数年後、風化しかけていたこの論争をグリーンとウォルトン両者の難点を挙げながら呼び起こした、アンドリュー・グスタフソンの見解を概観しよう。そして最後に、この一連の論争を簡潔に総括したうえで、それが経営倫理学の理論展開にどのような影響を与えたのか、若干の私見を述べて終えることにしたい。

II. ポストモダン現象としての経営倫理学とは何か？

——R. M. グリーンの所論をめぐって——

1991年にマイアミで開催された「経営倫理学会(Society for Business Ethics)」の年次会合でなされたポストモダンに関するグリーンの報告に刺激を受けた同学会は、数年後、その機関誌 *Business Ethics Quarterly*, Vol.3, No.3. で「ポストモダニズムと経営倫理学」というテーマの特集号を企画した。当然、その巻頭を飾るのはグリーンの論文である⁷⁾。そこでまず、彼がどのような趣旨で、経営倫理学をポストモダン現象として捉えようとしたのかを確認すべく、この論文に目を通すことから始めよう。

もともとグリーンは、ポストモダニズムにはあまり関心を抱いていなかった。というのも、その思想運動と経営倫理学との関連性は希薄であると思えたからだ。ところが、その思想の先端理論の幾つかを調べていくうちに、彼は「経営倫理学が大いにポストモダンな現象であるのではないか」と考え直すようになり、果ては「ポストモダンの精神にどのような仕方に関与するか考察することは、経営倫理学者が自らの研究を再定義するのに役立つ」と確信するまでになった⁸⁾。では、彼は、そこに何を見だし、このような「知的転向」に至ったのだろうか。

グリーンによると、1970年代後半に建築の分野で初めて用いられた「ポストモダニズム」という概念は、その後さまざまなジャンルで使われるようになり、ほとんど一義的に定義するのは困難になった。にもかかわらず、そこにはほぼ共通して見られる2つの重要な特徴があ

5) *Rethinking Business Ethics: A Pragmatic Approach*, Oxford University Press, 2000, pp.35-49. 岩田浩・石田秀雄・藤井一弘訳『経営倫理学の新構想——プラグマティズムからの提言』文真堂、2001年、43-62ページ、を参照されたい。また、拙稿「経営倫理学と事実/価値二分法の問題——ジョン・デューイの価値理論を拠り所にして」『経営情報研究(摂南大学)』Vol.22, No.1, 2014. でも若干言及した。

6) この論争をめぐるのは、*Business Ethics Quarterly*, Vol.3, No.3, 1993. で特集号が組まれている。

7) 例えば、*Business Ethics: A European Review*, Vol.16, No.3, 2007. ではレヴィナス特集が、同じく Vol.19, No.3, 2010. ではデリダ特集が組まれている。

7) Green, R. M., "Business Ethics as a Postmodern Phenomenon", *Business Ethics Quarterly*, Vol.3, No.3, 1993, pp.219-225. 執筆時、グリーンは、ダートマス・カレッジの the John Phillips Professor of Religion ならびにダートマス大学アモス・タック経営大学院の Business Ethics 担当兼任教授であった。

8) Cf. *Ibid.*, p.219.

る。彼は、これらの特徴が経営倫理学の領野にも見て取れるがゆえに、そこには「ポストモダン現象が存在する」と考えたのである。以下、彼の見解を見ていこう。

まず初めにあげられる特徴は、ジャン＝フランソワ・リオタールが唱えた「大きな物語」の否定⁹⁾、すなわち、進歩や合理性といった近代社会を支えてきた大きな価値体系・「メタ物語」を正当化することで社会の同質化や総合化をめざそうとするプロジェクトを放棄することである。グリーンは、ほとんどの経営倫理学者が過去2世紀に渡り経済社会を支配してきた2つの競合的な権威主義的言説（アダム・スミスを嚆矢とする自由市場資本主義とマルクス主義）に対し批判的であることから、そこにも類似した特性があると考え、次のように主張する。「経営倫理学は、ある単一の経済理論や社会理論が組織的・経済的生活の中で絶えず生起する倫理的諸問題に対処したり、それらを取り除いたりできるという見解を拒否する企てであるがゆえにポストモダンである¹⁰⁾」、と。

次にグリーンが指摘するポストモダニズムの顕著な特徴は、「パースペクティヴの『脱中心化』と、『他者性』『差異』ならびに境界性(marginality)の発見¹¹⁾」である。これは、近代の普遍的ディスコースの観点を確立してきた「白人・男性中心的」な欧米文化・社会が脱植民地運動、市民権運動、女性・ゲイの解放運動の台頭等によって後退を余儀なくされてきたのを受け、脱中心的観点から他者の多様な意見や視点を真摯に取り込むべきだというものである。グリーンによると、経営倫理学も、経営のグローバル化を背景に倫理的多様性の問題が1つの重要な研究課題となり、また方法論的にも学際的アプローチ（方法論的多様性）を採用せざるをえないことを理由に、ここで指摘したポストモダニズムと同様の特性があると主張す

る¹²⁾。

このように、グリーンは、経営倫理学にはポストモダニズムに内在する2つの重要な思想的特徴が見られるがゆえに、斯学を「ポストモダン現象」と捉えるのは妥当だと考えるのである。とはいえ、彼がポストモダン論者の主張に全面的に同意したというわけではない。その証拠に、彼は、一部のポストモダン倫理学者が唱える反基礎づけ主義には与せず、「ポストモダニストが主唱する本当の開放性や寛容は……基礎づけ主義者が擁護しようとする主体の自律性と民主的手続きの合理性の規範に訴えることがなければ最終的に不適當である¹³⁾」と言い放つ。また彼は、道徳的正当性の徹底的な説明を提供しようとする努力は「不可欠な合意と正当な倫理的差異の領域を確立することによって、真の道徳的多様性の道を開くとともに腐敗的な道徳的相対主義を回避しようと確信する¹⁴⁾」とも述べている。そのうえで彼は、「経営倫理学の内部には、より辛辣で理論的な経済的・社会学的パースペクティヴの余地がある¹⁵⁾」ことを容認する。

このように自らの思想的立ち位置を明確に示したうえで、グリーンは次のような信念の表白でもって論を閉じている。「私は、どんな大き

12) Cf. *Ibid.*, pp.223-224. グリーンは、「この方法論的多様性は特に経営倫理学教育のケース・メソッドに見られる」と指摘する。そこでは、組織における複雑な倫理問題に接近するには一元的・演繹的な推論様式ではなく、意見や見解の多数性が必要であることが強調される。要するに、このメソッドの議論では、正しい（あるいは間違った）倫理的回答は存在せず、むしろ「学習と進歩はパースペクティヴの囲い込みに向けての動きと、代替的諸見解を理解すべく傾聴に努めるという手続的公正さにある」(p.224.)という信念が存在するのだ。

13) *Ibid.*, p.224.

14) *Ibid.*, p.225.

15) *Ibid.* 続いて彼は次のように述べている。「時には、歴史を秩序づけ、そして私たちが直面する課題の体系的局面を覚悟させる大きな物語のコンテキストの中に私たちの現今の関心を見いだすことは重要だ」。

9) リオタール著、小林康夫訳『ポストモダンの条件』水声社、1986年。

10) Green, *op.cit.*, p.223.

11) *Ibid.*, p.221.

な理論的構造も経営倫理学の領域では絶えず代替的な方法やアプローチとして並置されるといえるのが斯学の特徴であると信じる。私たちは……この多様性のプロセスに関与し続けるという点で経営倫理学者なのだ。この関わりにおいて、私たちはポストモダンの精神に参加するものと信じる¹⁶⁾」。

Ⅲ. 経営倫理学とポストモダニズム： それは危険な戯れか？

——C. C. ウォルトンのグリーン
批判をめぐって——

このグリーン論文に対し3本のリプライ論文が提出されたが、中でも最も詳細かつ辛辣なコメントを寄せたのが経営倫理学界の重鎮、ウォルトンであった¹⁷⁾。以下では、この比較的長大な彼の論考の要点のみ簡単に押さえておこう。

ウォルトンは、ポストモダニズムが「①仕事権や従業員のプライバシー等の問題に気づかせ、②倫理的多元主義を主張することで意思決定に先立ち多様な意見を検討することを促し、③他者の価値や文化への尊重を奨励し、④不当な特権に対し警鐘を鳴らし、⑤寛容の徳を優先させ、⑥論理実証主義を批判し、⑦強力な社会的圧力の個人的行動への影響を認識し、⑧公正な合意形成を訴え、⑨継続的修正と変化する社会条件へのより良い解釈の形成を求め、⑩女性やマイノリティーを尊重し、⑪資本主義の慣行に潜む諸問題に気づかせ、⑫徳倫理の関心を復

活させる」という特徴をもつ点で、評価できる面があることを率直に認める¹⁸⁾。とはいえ、そこには「経営倫理学の健全な発展を保証するよりもむしろ脅かす¹⁹⁾」ことになる次のような問題点があると指摘する²⁰⁾。すなわち、ポストモダニズムは、①それが破壊しようとする哲学体系に代わる一貫性のある哲学を提示できず、②道徳的思考のための確たる基礎を提供できず、③寛容を強調することで倫理的相対主義に偏り、④ニーチェ的なニヒリズムに陥り、⑤マージナルなものへの関心に責任的であるのはそれ固有のものだと思い込み、⑥原則に基づいた論理に依拠して論証することができず、⑦実際には神学的倫理学から世俗的・異教的倫理学への移行の最新の段階であるかもしれず、⑧伝統的な哲学の貢献全体を削除し、⑨ジャーゴンに充ちており、⑩脱構築的分析を新奇なものに見間違っている、と批判的に捉えるのである。

このように、その長短を比較衡量することにより、ウォルトンは「ポストモダンに基づいて経営倫理学を構築するのは賢明ではない²¹⁾」と自らの立場を鮮明にする。そのうえで、彼は最後に、グリーンに対し11項目に及ぶ質問を投げ掛ける²²⁾。少々長くなるが、要点のみ簡潔に記しておこう。

①ポストモダニズムは欧州やアメリカの知的エリートの間で確たる地位を得ているが、その意味は現今の経営倫理学をポストモダンと同一視するのを保証するのに十分なほど明確であるのか？ ②ポストモダニズムによる大きな物語の否定は必ずしもマルクスの大きな物語の信者の多くを減少させていないが、このことは私たちを倫理的討議から遠ざけ、ますますイデオロギー的な討議に向かわせるのではないか？ ③グリーンはポストモダニズムの意味を付与すべ

16) *Ibid.*

17) Walton, C. C., "Business Ethics and Postmodernism: A Dangerous Dalliance", *Business Ethics Quarterly*, Vol.3, No.3, 1993, pp.285-305. ウォルトンは、コロンビア大学ビジネス・スクールの Philip Young Professor などを経て、執筆時ニューヨークのイェンバ大学名誉客員教授であった。ちなみに、他の2つの論文は、Rasmussen, D. M., "Business Ethics and Postmodernism: A Response", pp.271-277. (彼は執筆時ボストン・カレッジ哲学教授)と Schmidt, D. P., "Postmodern Interviews in Business Ethics: A Reply to Ronald Green", pp.279-284. (彼は執筆時フェアフィールド大学の経営倫理学助教授)である。

18) Cf. *Ibid.*, pp.297-298.

19) *Ibid.*, p.286.

20) Cf. *Ibid.*, pp.298-299.

21) *Ibid.*, p.285.

22) Cf. *Ibid.*, pp.299-300. ただし、この項目リストには、グリーン論文の内容とは掛け離れた質問も含まれているように思われる。

くりオータルに多くを負うが、それでは不十分である。より重要なのはハイデガーであり、特に彼がニーチェに依拠する点は注目に値する。このことは、宗教が徳倫理学を形成するのに何の役割も果たさないことを意味し、グリーンもこの点を暗に認めている。だとすれば、人間が占有する道徳的空間がその倫理的空間よりも大きい場合、誰がその空隙を埋めるべきなのか？ ④グリーンは上述した問③に対し「プレイを継続させよ、……そして平穩にプレイしよう」と言って受け流すかもしれない。その勧告は尤もかもしれないが、だがそれだけでは「誰がそのルールを作る権威をもち、そのルールは何であり、そのプレイヤーの目標は何か」といった重要な問題には答えられないのではないのか？ ⑤グリーンは、「高い文化」の代表者が幾つもの論証的实践を矮小化してきたが、ポストモダニズムはそうした学術的エリートの力を弱めるであろうと記述するが、ここで言われる論証的实践とは一体何なのか？ ⑥グリーンは大きな物語の否定をもっぱら強調するが、しかし例えば新古典派経済学の否定はポストモダン思想に独創性を与えるのか？ ⑦ポストモダニズムは「ある単一の経済理論や社会理論が経済生活の中で絶えず生起する倫理的諸問題に対処できる」ことを否定する点でユニークなのか？ それとも、いかなる単一の理論も経済生活の問題のすべてを説明してこなかったことからすれば、その提言は無意味なのか？ ⑧道徳的探究に携わっていた者が提示した専門知識の多様性は、各専門家集団が経営問題に別様の方法論を持ち込むがゆえに、経営倫理学がポストモダン現象であることを示すのか？ それとも、今日の実状の複雑性が倫理的議論に寄与するさまざまな専門家を要請するのか？ ⑨グリーンは「組織生活のようなケースの議論では、しばしば唯一の正・誤の倫理的回答など無い」と言うが、「しばしば無い」と「決して無い」との間には差異はあるのか？ いずれにせよ、正しい答えがないなら、経営倫理学の存在自体が控え目に言っても不安定になるのではないのか？ ⑩

グリーンは「カントによる実践理性の論理における倫理学の基礎づけ」の放棄に躊躇しながらも、「統一的・全体的な方法を負わそうとすることに必ずしも納得したわけではない」と主張する点で、パラドックスに陥っているのではないのか？ ⑪歴史学者ガートルード・ヒンメルファースはポストモダニズムを「過剰にラディカルである」としたうえで「ポストモダニズムは言語と離れたあらゆるリアリティを否定することで、言語の構造とともに社会の構造をも転覆させる」と非難するが、この見解は正しいのか否か？ 以上である。

さて、これら多岐にわたるウォルトンの質問に対しグリーンは公式に返答しなかったので、両者の誌上論争はこれ以上深まることなく終息した。その意味では、伝統的な倫理学に疑問を呈するポストモダニズムの挑戦は「あらゆる分野の応用倫理学への挑戦に転化し、ひいては経営倫理学の使命を劇的に再定義するであろう²³⁾」といった当初の期待に沿うほど、その論争が実り豊かなものであったか判断するのは難しい。いずれにせよ、こうして経営倫理学におけるポストモダン論争は、明確な意義を見いだせぬまま消沈していくかのように思われた。ところが、前掲の『特集号』発刊の7年後、グリーンとウォルトン双方の所見を批判したうえで、ポストモダンな経営倫理学の可能性を再検討しようとする新鋭の研究者が現れてきた。アンドリュー・グスタフソンである。次節では、この彼の論考²⁴⁾に一瞥を加えることにしよう。

23) これは、脚注5) で示した特集号の編集責任者パトリシア・H. ワーヘインの巻頭言の中の一節である。Werhane, P. H., "Special Edition: Postmodernism and Business Ethics", *Business Ethics Quarterly*, Vol.3, No.3, 1993.

24) Gustafson, A., "Making Sense of Postmodern Business Ethics", *Business Ethics Quarterly*, Vol.10, No.3, 2000, pp.645-658. 彼は、執筆時、ウィスコンシン州ミルウォーキーのマーケット大学哲学科の博士号候補生であった。

IV. ポストモダンな 経営倫理学は可能か？

——A. グスタフソンの所論をめぐって——

グスタフソンは、ポストモダンな経営倫理学の可能性を探るために、先行研究を無視して新たに考察を始めるのではなく、既存の諸研究の批判を通じてポストモダニズムの経営倫理学的意義を再検討しようと試みる。その際、彼が代表的な先行研究として取り上げたのが前述したグリーンとウォルトンの論考であった。まずは、彼が提示したグリーン批判の要点から見ていこう。

1. グリーンに対する批判

既に見たように、グリーンは、両者に共通した2つの特徴を拠り所にして「経営倫理学はポストモダン現象ではないか」と問題提起した。その根拠を簡単に振り返ると、第1に、経営倫理学は、リオタールが「大きな物語」を否定したのと同様に、「単一の経済・社会理論が組織生活の中で絶えず生起する倫理的諸問題を処理できるという見解を否定する」がゆえにポストモダンであるということ。第2に、それは、ポストモダニズムの特徴である「パースペクティヴの『脱中心化』と『他者性』『差異』ならびに境界性の発見」を共有するがゆえにポストモダンであるということである。この見解に対して、グスタフソンは、経営倫理学者の間では依然としてマルクスやフリードマンの経済学説に立って自説を展開する者も相当いるし、またこれらの学説以外の包括的な理論的・哲学的枠組みの下で研究する者も存在すること等を指摘することで、グリーンによる第1の理由づけを批判する²⁵⁾。また、第2の根拠についても、マイノリティーや文化多様性の問題は、必ずしもポストモダニズム固有の関心事ではないので、こうした事柄に関心を抱く多くの経営倫理学者の存在でもって斯学にはポストモダン現象が見ら

れると断定するのは早計ではないか、と疑義を唱える²⁶⁾。

それにも増して、グスタフソンが問題視するのは、「私たちの組織生活の状況においては、しばしば唯一の正・誤の回答など存在しない。学習や進歩は、様々な見方を包摂することに向かう動向や代替的見解を理解するために傾聴に努めるという手続的公正さにある」という意味で、他者に開かれているがゆえに「経営倫理学はポストモダンである」というグリーンの最終的な主張である。グスタフソンは、この主張に対し、①多様な見解に傾聴することは、どんな種類の学習にも要請されるものであるから、それでもってポストモダンとは断定できない、②手続的公正性の要請は近代や古代ギリシア思想の特徴でもあるので、ポストモダンな経営倫理学の決め手にはならない、③包括的な真理に反対しながら「基礎づけ主義を全否定したくない」といったグリーンの二律背反的な態度は理解し難い、との理由から難色を示す²⁷⁾。

このように、グスタフソンは、グリーンによるポストモダニズムの特徴づけに潜む近代的なニュアンスを炙り出し、結論として彼の論考は「刺激的ではあるが誤っているように思われる²⁸⁾」と厳しく批評するのである。では、ウォルトンに対してはどのような批判的考察がなされたのであろうか。瞥見しよう。

2. ウォルトンに対する批判

グスタフソンは、「ウォルトンによるグリーンの批判論文は経営倫理学におけるポストモダニズムの議論を促進するのに大いに有益である」と好意的に評価したうえで、そこで提起されたポストモダニズムの諸特徴については異議

26) Cf. *Ibid.* 「例えば、ロックは女性問題について論究していたし、リンカーンは奴隷の権利のための重要な文書を作成していた」が、だからと言って「彼らがポストモダニストだと言えるのか」とグスタフソンは問うている。

27) Cf. *Ibid.*, p.647.

28) *Ibid.*

25) Cf. *Ibid.*, p.646.

を挟まない²⁹⁾。ここで彼が問題視するのは、ウォルトンが提示したポストモダニズムの問題点についての妥当性である。彼は、それを8項目にまとめて批判する。以下、各々の見解を簡潔に確認していこう。

まず第1に、「ポストモダンがそれが破壊した体系に代わる選択肢を提示できないし、また倫理的思考のための基礎も提供しない」というウォルトンの批判についてであるが、これに対しグスタフソンは、この主張が「すべてのポストモダン思想家に当てはまるわけではない」と、例示しながら反論する³⁰⁾。

第2に、「ポストモダン思想が倫理的無関心主義になりうる」といったウォルトンの主張に対し、彼は「必ずしもあらゆるポストモダン論者がそこに行きつくわけではない」として、その代表的論者であるレヴィナスやジグムント・バウマン等の倫理的関心を示しながら反証する³¹⁾。

第3に、グスタフソンは「デリダやレヴィナスといった多くのポストモダン思想家が自らの哲学的基礎に正義、個人的責任、共同体主義的自由への根強い欲求をもつ」ということを根拠にして、「ポストモダニズムはニーチェのニヒリズムである」といったウォルトンの主張が偏見に満ちている、と論難する³²⁾。

第4に、彼は、ウォルトンの「ポストモダニズムは周縁化されたものへの関心に対する責任がない」という主張に対し、そうではなく「ポストモダン論者は、モダニティにそれ固有の原理に直面させ、モダニティそのものの内側の偽善を開示させることで、周縁化されたものへの関心を活性化させてきたのだ」と真っ向から反論する³³⁾。

第5に、グスタフソンは、「ポストモダニズムは原則に基礎づけられた論理に依拠して論証することができない」というウォルトンの主張の妥当性をデリダの正義論、フーコの自由論、レヴィナスの倫理論に照らして疑問視する³⁴⁾。

第6に、「ポストモダニズムのほとんどは神学から世俗的で異教的な倫理学への移行の最も新しい段階である」といったウォルトンの主張に対して、グスタフソンは「ポストモダニズムのすべてが有神論的思想（特にキリスト教思想）に矛盾するかは明らかではない」と疑義を抱く³⁵⁾。

第7に、グスタフソンは、「ポストモダニズムは哲学が果たしてきた貢献の伝統をすべて切り落とす」というウォルトンの批評は誤りであると指摘したうえで、むしろそれは「モダンな先行者の反応と改訂なしにありえない」と主張する³⁶⁾。

そして最後（第8）に、「ポストモダン哲学がジャーゴンに充ちている」というウォルトンの批判に対し、これに反論するのは確かに難しいが、だからと言って「それが理由で経営倫理学に大きな衝撃を与えるとは考えにくい」と異を唱える³⁷⁾。

以上の記述から読み取れるように、グスタフソンの目には、ウォルトンのポストモダン批判が多分に偏向したものに映ったようだ。とはいえ、グスタフソンは、その批判の意義を全く容認しないわけではない。むしろ彼は「特殊なイデオロギーの隠れ蓑にならないような『ポストモダン』と明確に呼ばれうる地位を私たちは適切に提示することができるのか？³⁸⁾」といったウォルトンが提起した課題に共感を示している。では、彼は、ポストモダニズムをどのように捉え、経営倫理学といかに関連づけようとし

29) Cf. *Ibid.*, pp.647-648.

30) Cf. *Ibid.*, p.648. その一例として彼は、「何が正で何が不当かを決定するプロジェクトは継続しなければならないと考えられる」というジャック・デリダの見解をあげている。

31) Cf. *Ibid.*, pp.648-649.

32) Cf. *Ibid.*, p.649.

33) Cf. *Ibid.*

34) Cf. *Ibid.*

35) Cf. *Ibid.*

36) Cf. *Ibid.* 続けて彼は、「デリダやフーコのような学者の著作が近代哲学の先行者に言及しないことを見いだすのは通常困難だ」と述べている。

37) Cf. *Ibid.*, p.650.

38) Cf. *Ibid.*

たのであろうか？ 彼の見解を概観することにしてしよう。

3. ポストモダン経営倫理学の諸特徴

グスタフソンは、「もしポストモダン倫理学が経営倫理学にとって何らかの価値をもつなら、それは1つの倫理構造を築くために基本的な原理のセットを提供することにあるのではない³⁹⁾」と主張する。なぜなら、現下のビジネス環境は「私たちの道徳的ジレンマの多くがどれほど曖昧であるかを自覚させ、そしてそのことが道徳的絶対性を見いだす私たちの能力に関する楽観論を低下させることになった⁴⁰⁾」と考えられるからだ。そこで、ポストモダンと経営倫理学との関連性について考察するにあたり大切なことは、バウマンが示唆したように、「倫理学に対するポストモダンなアプローチの新奇性が……道徳的問題に取り組む典型的に近代的な方法（すなわち実践における強制的な規範的規制を用いた道徳的課題への対応、ならびに理論における絶対性、普遍性、および基礎づけに関する哲学的探求）の否定にある⁴¹⁾」という認識をもつことになろう。このように考えて、グスタフソンは、「経験論、合理論、ロマン主義のいずれかによって究極的かつ普遍的な解決策をめざす人間理性における無制約な教化主義的楽観論」を棄却し、それとは異なる接近戦略——すなわち絶対性、普遍性ならびに基礎づけを探求しない戦略——を用いることで、ポストモダン倫理学と経営倫理学との知的交流を図り、そのうえで「ポストモダン経営倫理学」なるものを構想しようと試みるのである⁴²⁾。

グスタフソンによると、自らがイメージするポストモダン経営倫理学は以下の4点で特徴づけられうる⁴³⁾。

第1に、それはホーリズム——個人的な倫理的行動と専門家的なそれとの区別を徹底的に放棄すること——を志向するということである。グスタフソンは、「人は時に企業人として、または利己的な私人として行為するが、常に一人の人間であることには変わらない」ことから、私的な倫理と経営倫理との間の線引きをモダニティの残滓と捉えることで⁴⁴⁾、ポストモダン経営倫理学の立場を鮮明にしようとするのである。

第2に、それは真空の中で抽象化された理論ではなく、ナラティブなアプローチに依拠するということである。この特徴は、ポストモダン経営倫理学がビジネス活動を「私たちの生活全体の見方の不可欠な部分である」と考えることを意味するとともに、「理論を通して倫理的基礎を獲得しようとする伝統的な試みに懐疑的である」ことを示唆する⁴⁵⁾。そこでの方法的特徴は、厳格な原則を適用することではなく、生活に根ざしたナラティブに注意を向けることなのである。

第3に、ポストモダン経営倫理学は普遍理論に懐疑的であるということである。すなわち、さまざまな状況のユニークさや、ある状況下でうまく当てはまる原則が他ではうまく当てはまらない現実を考慮したとき、あらゆる状況で揺るぎなく永続的に適用しうる完全な規則のセットを用意することなど幻想にすぎないというわけだ。だからと言って、それは決して倫理観の促進を阻止することをもくろむものではない。むしろ、それは普遍的ないし絶対的な倫理的主張に批判的眼差しを向けることで、より現実的で実効的な方向に舵を切ろうとするものである。

そして第4に、ポストモダン経営倫理学は倫理の探求を停止するには及ばないが、その探求

39) *Ibid.*

40) *Ibid.*, p.651.

41) Bauman, Z., *Postmodern Ethics*, Blackwell, 1993, pp.3-4.

42) Gustafson, *op.cit.*, p.651.

43) Cf. *Ibid.*, pp.652-654.

44) グスタフソンは、その1つの理由づけとして「モダニティは家庭と企業との分離から始まった」(Bauman, *op.cit.*, p.5.)というバウマンの言明を引用している (*Ibid.*, p.652.)。

45) Cf. *Ibid.*

の矛先は確実性の探求ではなく、「適度な探求 (tempered quest)⁴⁶⁾」を求めて努力することに向かうということである。ここに、成長ないし改善としての倫理的特性を見て取ることができよう。

このようにグスタフソンはポストモダン経営倫理学を特徴づけたうえで、次のようにまとめている。すなわち、経営倫理学が望んでいることは「私たちの文化に存する政治的・社会的多元主義に取り組み、倫理的意思決定をするための体系的ではあるが柔軟な方法を獲得することになることである。単なる相対主義を取り入れることなく適応性を獲得することが、ここで極めて重要なのである⁴⁷⁾」。

以上がグスタフソンの所論の概要である。端的に言えば、それは、著名なポストモダン思想家の諸説を参照軸にしながら、「経営倫理学にはポストモダン現象が見られる」としたグリーンのポストモダン解釈の不十分さを暴くとともに、グリーンの見解に異を唱えたウォルトンによるポストモダン批判の妥当性をも疑問視したうえで、経営倫理学とポストモダニズムとの思想的関連性を改めて見直そうとしたものであった。確かに、哲学専攻の学徒だけあって、彼の所論は、先の経営倫理学のポストモダン論争で繰り広げられた諸説に比べ、的確な思想的根拠に基づいたより説得力のある議論を展開しているように見える。しかしながら、肝心の彼が主唱する「ポストモダン経営倫理学」に関して言えば、単にその特徴が幾つか列挙されただけで、その概念構成に関わる体系的な説明や、それが有する実践的含意についてはほとんど触れられていない。その意味で、彼の所論はポストモダンな経営倫理学の可能性を示唆した原初的な論考の域を超えるものではなかった、と評価

せざるをえないであろう。

V. 結 言

——経営倫理学における ポストモダン論争の意味——

経営倫理学の理論的な転換期（1990年代半ば）に生じたポストモダン論争は、こうしてグスタフソンによって再び俎上に載せられ検討し直されたわけだが、その後はほとんど注目されることなく終息していった。もっとも、近年では「ポストモダン」という言葉そのものが流行らなくなってきたことを思えば⁴⁸⁾、ある意味これも自然の成り行きであったのかもしれない。とはいえ、権威ある米国専門誌で特集号を企画してまで紹介された論争だけに、それは斯学の理論的・方法論的研究の行方にそれなりのインパクトを与えたことは否定できまい。そこで最後に、この点について若干の私見を述べて稿を結ぶことにしよう。

結論を先取りして言えば、この経営倫理学におけるポストモダン論争は、確かに理論的成果に関して見れば乏しかったかもしれないが、しかしながら以下の3つの点でその後の研究動向に影響を及ぼしたように思われる。

まず考えられるのは、揺籃期の経営倫理学を支えてきたオーソドックスな研究方法に対する当時の批判的な議論をより活発なものにし、その後の理論的進展の一助になりえたということである。既に述べたように、90年代半ばは、斯学で広く受け入れられてきた道徳基準の演繹的適用法——概して近代思想を拠り所に抽出された道徳諸原則を倫理的決定に応用する形式の「トップダウン方式」⁴⁹⁾——に対し多くの疑問や

46) より具体的には、それは「より良い適合性をもった倫理的行動（まさしくより良く意味づけしうる倫理を有する行動）という考え方や、少なくとも現在他のアプローチよりもより良く機能しうる倫理を求めるということ」(Ibid., p.653.)である、とグスタフソンは記している。

47) Ibid., p.654.

48) 例えば、岡本は、「ポストモダン」は1970～80年代にかけて世界的に流行したが、その流行は長続きせず、今や「ポモ」などといって嘲笑の対象になっている、と述べている（岡本裕一郎『いま世界の哲学者が考えていること』ダイヤモンド社、2016年、23頁）。

49) このように、先験的な原理的知識を根拠に状況の善悪を決していこうというスタンスゆえ、これは「基礎づけ主義」の立場に近い。

批判が寄せられた時期であった。そうした情勢の下、ポストモダニズムをめぐる論争が浮上してきたことは、経営倫理学の研究動向がモダン志向の揺籃期から次の段階に向けて大きく踏み出したという印象を学界に広く植え付けることで、新たな理論展開に弾みをつける一定の効果があつたと察せられるのである。

それとの関連で付言すれば、この論争を契機にして経営倫理学における「反基礎づけ主義」の流れが一気に勢いづいたことも指摘できるかもしれない。確かに、この論争の仕掛け人であつたグリーンは、斯学にはポストモダン現象が見られると主張しつつも、その思想的特徴の1つである反基礎づけ主義には最終的に懐疑的な態度（後年グスタフソンにその点を突かれ、「二律背反的だ」と指弾されたわけだが）を示した。だが、その後の理論傾向を一瞥すると、ビジネスを取り巻く価値の多元化・流動化という現実を前にして、それまで支配的であつた基礎づけ主義に頼らない方法を採用する諸研究が様々な思想（例えば、徳倫理学、プラグマティズム、コミュニタリアニズムなど⁵⁰⁾）を拠り所にして台頭してきたことが認められる。こうした理論的現状に照らして考えると、この論争は、皮肉にもグリーン of の思いとは逆の流れを招く呼び水になったと言えなくもなからう。

そして第3に考えられることは、この論争が経営倫理学の研究フィールドを北米中心から欧州圏さらには世界規模へと広げるとともに、現代大陸思想からのアプローチを促進する起点になりえたということである。というのも、大陸発祥の思想であるポストモダニズムがアメリカ

経営倫理学界で主題化されたことは⁵¹⁾、欧州圏での経営倫理学への関心を高めるうえで少なくとも効果的であつたと推測されるからだ。ちなみに、90年以降の欧州圏におけるその動向を瞥見すると、グリーンによる学会報告の翌年（1992年）には有力機関誌 *Business Ethics: A European Review* が創刊された——しかも興味深いことに、同誌は今世紀になり（つまりグスタフソン論文発表の数年後）、レヴィナス、デリダの思想との関連を問う特集号を相次ぎ組んでいる⁵²⁾。同じく現代大陸思想に立脚した経営倫理学の研究は、ロスキルド大学（デンマーク）のヤコブ・D. レンドトルフやステレンボッシュ大学（南アフリカ）のミンカ・ウェールマンの近著⁵³⁾を始め、世界的に広がりつつある。このように、さすがに「ポストモダン」のタイトルは影を潜めたとはいえ、その思想的流れを汲む研究は欧州圏を中心にむしろ増える傾向にある⁵⁴⁾。こうしたことから、90年代のア

51) しかも、その討議に著名な大陸哲学の研究者であるデヴィッド・M. ラスマッセンも参画したことは学術的に大きなインパクトを与えたかもしれない（彼の寄稿論文については本稿の脚注17を参照されたい）。ちなみに、彼の編書 *Universalism vs. Communitarianism: Contemporary Debates in Ethics*, MIT Press, 1990. は邦訳されている（菊池理夫・有賀誠・山口晃訳『普遍主義対共同体主義』日本経済評論社、1998年）。

52) それぞれの巻号については、本稿の脚注6を参照されたい。

53) Rendtorff, J. D., *French Philosophy and Social Theory: A Perspective for Ethics and Philosophy of Management*, Springer, 2014. Woermann, M., *On the (Im) Possibility of Business Ethics: Critical-Complexity, Deconstruction, and Implications for Understanding the Ethics of Business*, Springer, 2013. ちなみに、ウェールマンは同書の中で、本稿で取り上げたウォルトンとグスタフソンの論考について数頁にわたり言及している（pp.10-13.）。

54) 殊、経営倫理学の理論研究に関しては、今やアメリカよりも欧州圏の方が盛んであるように思われる。ちなみに、近時では、ミュンヘン工科大学の研究者によって編集された次の理論書（3巻本）が上梓された。Luetge, C. (ed.), *Handbook of the Philosophical Foundations of Business Ethics, Vol.1-3*, Springer, 2013.

50) 紙幅の制約上3点ほど紹介しておこう。Solomon, R. C., *Ethics and Excellence: Cooperation and Integrity in Business*, Oxford University Press, 1992. Buchholz, R. A., and S. B. Rosenthal, *Business Ethics: The Pragmatic Path Beyond Principles to Process*, Prentice-Hall, 1997. Donaldson, T., and T. W. Dunfee, "Integrative Social Contracts Theory: A Communitarian Conception of Economic Ethics", *Economic and Philosophy*, Vol.11, 1995.

メリカ経営倫理学におけるポストモダン論争は、斯学の欧州圏における展開に、ある意味先鞭をつけたと考えられなくもなかろう。

以上のように、経営倫理学研究の世界的な隆盛の影で忘却の淵に沈みかけていた、90年代アメリカ経営倫理学界で展開されたポストモダン論争をこうして今改めて読み返してみると、それは意外に、斯学のその後の理論的・方法論的研究に有意な示唆を与え、研究手法に厚み

を持たせることに少なからず寄与したことが窺える。学史研究では往々にして、その当時は些末な論争であると思われていたものが、後年振り返ると先駆的な事象であったことに気づかされることがある。その意味で、本稿で紹介した、このポストモダン論争は経営倫理学史におけるその一例であると言えるかもしれない。

(受理 2018年1月16日)